

ジョルジエ・アマード著『ドナ・フロールとふたりの夫』より (1)

—序文から第一部第3章まで—

尾河直哉

Tradução japonesa de *Dona Flor e seus dois maridos* de Jorge Amado (1)

NAOYA OGAWA

キーワード

ブラジル現代文学 (literatura contemporânea brasileira) /
北東部文学 (literatura nordeste) / バイーア文化 (cultura baiana) /
ジョルジエ・アマード (Jorge Amado)

《解題》

現代ブラジルの国民的作家ジョルジエ・アマード (Jorge Amado, 1912-2001) の長編小説『丁字と肉桂のガブリエラ』(彩流社、二〇〇八年。原著は *Gabriela, cravo e canela*, 1958) を筆者は過年翻訳刊行し、さいわい、新聞などでも取り上げられ好評を得た。ここに翻訳を開始するのは、そのアマードがおよそ十年後にものした長編小説『ドナ・フロールとふたりの夫』(*Dona Flor e seus*

dois maridos, 1966) である。アマードについては『丁字と肉桂のガブリエラ』の「訳者あとがき」ですでに詳しく述べたが、一部重複をいとわずここに記しておきたい。

ジョルジエ・アマードは一九一二年、バイーア州イタブーナ市のカカオ農園で生まれた。父親は農園の失敗からイリエウスに移ったのち、再びイタブーナ近郊に農地を買っている。幼いアマードは、『丁字と肉桂のガブリエラ』の舞台となったイタブーナイリエウス周辺で育ったのである。小説中に語られる「大佐」たちのように、父親は土地をめぐる争いから二度、女性をめぐる争いから一度銃で撃たれているし、母方にも土地争いに加わった親戚がいるというから(「大佐」たちの土地争奪戦については『果てなき大地』で詳しく語られている)、登場人物の観点からしても、アマードの生

い立ちがこの傑作の誕生と深くかわわっていることは間違いない。

学生時代はバイーア州の州都サルヴァドールで気ままな独り暮らしを送るなか、カンドンブレやカポエイラといったアフロ・ブラジル文化に触れ、バイーアの民衆文化を存分に吸収した。この時期にはまた一時新聞記者として働いたり、文学青年グループ「反逆者のアカデミー」に参加し、「近代芸術週間」に代表される一九二〇年代の近代主義運動に棹さしている。保守的な文学を痛烈に批判するこの運動も『丁字と肉桂のガブリエラ』に語られていて、いつとき運動に帰依した自称詩人にして貧乏教師ジョズエが、「韻律の桎梏から解き放たれ」た詩の制作に勤しみ、守旧的な桂冠詩人アレジレウ・バルメイラを「時代遅れ」と詰っている。読者はジョズエの姿に青年アマードの、あるいはこの時代の文学青年たちの、いささかコミカルな肖像を認めることができるかもしれない。

リオ・デ・ジャネイロに出て大学の法学部に進学したアマードは、十八歳で本格的に作家活動を開始した。批評家の注目を浴びた処女作『カーニバルの国』(一九三一年)にひき続き、カカオ農園の過酷な労働を描いた『カカオ』(一九三三年)、サルヴァドールの底辺に暮らす民衆を描いた『汗』(一九三四年)を発表。黒人孤児の生涯を描いた第四作『ジュビアバー』あたりからアマードの小説には民衆文化の色合いが濃くなる。海に生きる男の悲劇を描いた『死せる海』(一九三六年)に続いて、サルヴァドールを舞台にストリート・チルドレン暮らしを描いた『砂の戦士たち』(一九三七年)が上梓される。『砂の戦士たち』は二〇〇三年に日本のミュージカル劇団が舞台化して好評を博している。ブラジル共産党初代書記長ルイス・カルロス・プレステスの半生を綴った伝記『希望の騎士——革命児プレステス』(一九四二年)のあとにくるのが『果てなき土地』。カカオ地域の血塗られた土地争奪戦を描く傑作である。『丁字と肉桂のガブリエラ』との関連も深く、共通の登場人物もひとりふたりにとどまらない。『イリエウスの聖』(一九四四年)

は前作『果てなき土地』の三〇年後から始まる続編。輸出業者との抗争、カカオの高騰と農地の凋落などが描かれている。『飢えの道』(原題「赤い沃野」、一九四六年)は、干魃に襲われた北東内陸部(セルタン地帯)から歩いてサン・パウロを目指す被災家族の飢えと苦しみに満ちた旅を描いた。干魃に追われてセルタン地帯からイリエウスに出てきたガブリエラたちの旅として、これまた『丁字と肉桂のガブリエラ』にその一部が取り込まれている。一九五四年には、「新国家体制」下におけるバルガス政権の暴力と抑圧された労働運動の状況を描いた三巻本『自由への地下道』(「困難な時代」、「夜の苦惱」、「トンネルの明かり」)が発表された。

ご覧のとおり、ここまでのアマード作品は不正な社会に対する抗議、告発といった趣がきわめて強い。アンガージュマン文学、プロレタリア文学という言葉で概括できようか。この時期のアマードは実際の政治活動にも積極的にコミットしており、一九四六年には共産党から出馬して連邦議員に選出され、翌年党が弾圧されるとヨーロッパへ亡命している。

ところが、次の『丁字と肉桂のガブリエラ』(一九五八年)を境にアマードの作風はがらりと変わる。民衆に対する共感は一貫しているが、アンガージュマン文学、プロレタリア文学の主題と書法はるか後景に退き、その代わりに民衆的な笑いやユーモア、風刺が前景を占めるようになるのである。と同時に、アマード作品の主題はこれ以後、政治から女性を巡る物語へとシフトする。『丁字と肉桂のガブリエラ』にふれて「私は四十六歳にしてはじめて、政治のパンフレットに代わるもの———さんざん苦勞してやっと人間というものがよくわかるようになった者が浮かべる、楽しそうな、うれしそうな微笑———を見つけた」(高橋都彦訳、『老練なる船乗りたち』、旺文社、一九七八年、「解説」より引用)とアマードは述べているが、事は『丁字と肉桂のガブリエラ』にとどまらない。「キン

カス・ベロー・ダークアの二度の死」と「遠洋航海船長ヴァスコ・モスコゾ・デ・アラガンの物議をかもした冒険をめぐる真相の一部始終」という二つの物語からなる『老練なる船乗りたち』（一九六一年）も、官能的でコミカルなラブ・コメディ『ドナ・フロールとふたりの夫』（一九六六年）も、やはりこの「楽しそうな、うれしそうな微笑」に満ちている。悲惨な境遇と闘いながら力強く生き抜く女を描いた『テレザ』（一九七二年、原題は「闘いに疲れたテレザ・バティスタ」と「アグレステのティエタ。山羊会の女、すなわち奇蹟の娘の帰郷。五つのセンチシヨナルなエピソードと感動的な結末。感動とサスペンス」という長い正式な題名を持つ『アグレステのティエタ』（一九七七年）は、『丁字と肉桂のガブリエラ』、『ドナ・フロールとふたりの夫』とともに、アマードの女性シリーズとして括ることができよう。後期の主立った作品としてはその他に、ブラジルの「人種デモクラシー」を体現した混血児の物語『奇蹟の小屋』や、イタブーナの誕生を描いた『大いなる待ち伏せ…その謎の側面』（一九八四年）などがあるが、この『大いなる待ち伏せ』は、『果てなき大地』、『イリエウスの聖ジョルジエ』、『丁字と肉桂のガブリエラ』とともにしばしばカカオ連作と称されている。

以上のように『ドナ・フロールとふたりの夫』は『丁字と肉桂のガブリエラ』の延長線上にある「楽しそうな、うれしそうな微笑」に満ちた官能的かつコミカルな作品で、女性シリーズの第二弾に位置づけられる。また、後者に並ぶヒット作品となったことも特筆すべきだろう。『丁字と肉桂のガブリエラ』は一九八三年にはブルーノ・バレット監督によって映画化され、マルチエロ・マストロヤンニがナシブ役を、ソニア・ブラガをガブリエラ役を演じたが、『ドナ・フロールとふたりの夫』も一九七六年に同監督により映画化されており、主人公のドナ・フロール役には同じソニア・ブラガが起

用されている。ちなみに、この映画（邦題は『未亡人ドナ・フロールの理想的再婚生活』）は公開から二〇〇五年にいたるまで、ブラジル映画史上最大の観客動員数を記録した。

アマードの邦訳は『カカオ』（田所清克訳、彩流社、二〇〇一年）、『砂の戦士たち』（阿部孝次訳、彩流社、一九九五年）、『希望の騎士―革命児プレステス』（神代修訳、弘文堂新社、一九六七年）、『果てなき大地』（武田千香訳、新潮社、一九九六年）、『飢えの道』（神代修訳、新日本出版社、一九七三年）、『老練なる船乗りたち』（高橋都彦訳、旺文社、一九七八年）、『テレザ』（明日満也訳、東洋出版、二〇〇四年）、『ツバメとトラネコーある愛の物語』（高見英一訳、新潮社、一九八一年）、そして『丁字と肉桂のガブリエラ』と、すでに九点を数え、作家と作品についても「解説」や「訳者あとがき」等でかなり詳しく紹介されている。また、『ブラジル―カーニバルの国の文化と文学』（泰流社、一九九〇年）、『ブラジル文学事典』（田所清克、伊藤奈希砂共著、彩流社、二〇〇〇年）、『ブラジル北東部の風土と文学』（田所清克著、金壽堂出版、二〇〇六年）などを繙けば、いっそう豊富な情報が得られるだろう。アマードについてお知りになりたい向きはこれらの本ぜひ参照していただきたい。

〔翻訳〕

ドナ・フロールとふたりの夫

料理学校のベテラン講師ドナ・フロールおよびそのふたりの夫、すなわちヴァアディーニョと呼ばれる最初の夫と薬剤師である第二の夫テオドーロ・マドゥレイラ博士が織りなす心揺さぶられる神秘の物語

あるいは

海の神イエマンジャーが棲むラルゴ・ジ・サン・タナの近く、万聖人のサルヴァドール・ジ・バイーアのリオ・ヴェルメーリョ地区に居を構える作家ジョルジェ・アマードによって語られる〈精神〉と〈物質〉の驚くべき戦い

この暑く優しい四月の静かな午後、庭で猫と憩うゼリアに。初めて本を読み、初めて夢を見はじめたジオアンとパロマに。

たまたまこの世にいてくれたおかげでこの冴えない文章に名誉と名声を与えてくれた人物、代母ノルマ・ドス・ギマランイス・サンパイオに。ヴァデーニョが心の底から心酔したベアトリス・コスタに。テオドーロ・マドゥレイラ博士のためにファゴットで演奏される国家を聴く特権をもつエネイダに。ジョゼ・デ・ドメ画伯が黄土色と黄色の油彩で描いたドナ・フロールの肖像画を所有するジョヴァンナ・ボニーノに。著者への友情ゆえにここに集った四人の女友達に。

ディアウラス・リエデルとルイス・モンテイロに。

「神さまは太ってたぞ」(戻ってきたヴァデーニョが暴露した秘密)

「地球は青かった」(初宇宙飛行を成し遂げたガガーリンの言葉)

「どんなものにもひとつの場所があり、どんなものもその場所に収まっている」(テオドーロ・マドゥレイラ博士の薬局の壁にかかった二行連句)

ああ！(ドナ・フロールの溜息)

親愛なる友人ジョルジェ・アマードへ

わたしの作ったタピオカケーキには、じつを言うと、正式なレシピがありません。博物館のレナートさんの奥さま、ドナ・アルダが作り方を教えてくださったのですが、頭を抱えながらあれこれ試してみようちにやっとコツがつかめるようになりました(愛することには愛しながら学ぶのではないのでしょうか？ 生きるコツは生きながら学ぶのではないのでしょうか？)

お望みのサイズのタピオカケーキは二十個。あるいはもう少しあるかもしれませんが。ドナ・ゼリアにはまずひとつ大きなものを作ってみようとお勧めします。タピオカケーキはみんな大好きです。ふたつめが欲しくなるでしょうから。どんなに違うふたりの人でも、この一点では意見が一致すると思います。みんなタピオカケーキが大大好きだと。他のものも教えろとおっしゃるんですか？

アマードさん、それはちよつとご勘弁を。イライラしますのでそんなことはおっしゃらないで。砂糖。塩。おろしたチーズ。バター。ココナッツミルク。これは薄いものと濃いもののふたつが必要ですが(それにしてもアマードさん、あなたはあちこちの新聞にモノを書いていらつしやるからちよつとお尋ねしたいんですが、なぜ愛する人はふたり必要なんのでしょうか？ なぜひとりでは人の心を満たすことができなんでしょうか？)分量についてはお好みで。みなさんそれぞれ味覚が違いますから。甘いものを好む方も、塩辛いものを好む方もいらつしやるでしょう？ 混ぜあわせた練り粉はさらつとしたものの方が良い。オーブンは十分に熱してください。

このレシピでご満足いただければと存じます。とてもレシピとはいえないただの注意書きですが。手紙と一緒に送るケーキをご賞味ください。もしお気に召しましたら、その旨お知らせいただければと存じます。ご家族のみなさんはいかがお過ごしですか？ こちら

は元気でやっております。薬局用の店舗をもう一軒買い、夏用の家を一軒、イタパリカに購入しました。とつても素敵な家です。それ以外のことについてはアマードさんもご存知のとおりです。なにも変化はありません。曲がってしまったものはもう真つ直ぐにしようがありませんから。わたしの明け方についてはお話しいたしません。礼を失することにもなりますので。でも、海のうえに曙光をもたらすのが、あなたのしもべ、このフロリーペデス・パイヴァ・マドウレイラつまりドナ・フロール・ギルマンニスであることは間違いないです。

(ドナ・フロールが最近小説家に送った短い手紙)

第一部

ドナ・フロールの最初の夫ヴァデーニョの死について
通夜と(名手カルリーニョ・マスカレーニヤスのカヴァーキニョ演奏を伴った)その亡骸の埋葬について

料理学校味わいと技

通夜ではいつなに出すべきか

(ある生徒の質問にたいするドナ・フロールの回答)

悲嘆と涙に暮れ、いかに取り乱しているからといって、もてなしの悪い通夜ではいけません。家の女主人が今にも倒れそうにむせび泣き、苦しみに包まれてなにもできないとき、あるいは女主人本人が死んで棺桶に収まっているためなにもできないときには、親せきや友人が通夜を切り盛りしなければなりません。さもないと、夜通し不幸を分かち合おうとやってきた人々に、ときには冬に寒い思いをさせながら、飲むものも食べるものもなく放っておくことになり

ますから。

通夜がだらけることなく、故人の名誉ともなり、またその死によって混乱した最初の晩の重苦しさを少しでも軽くするためには、じゅうぶんに気を配って通夜を切り盛りし、参列者の心とおなかを満たす必要があります。

では、いつなに出すべきでしょうか？

もちろん、夜通し。通夜の開始から終了までです。コーヒーは欠かせません。言うまでもなく、常時小さなカップでお出しします。ミルク、パン、バター、チーズ、ビスケット、キャッサバ粉で作ったケーキがいくつか、目玉焼きを添えたコーンやキャッサバの焼き団子のスライスといったフルコースの朝食は朝だけ、徹夜してくださった参列者にだけお出しします。

コーヒーを切らないためにいつもお湯を沸かしておけばベストです。参列者は引きも切らずにやっていますから。コーヒーにはクッキー類を添えましょう。チーズやハムやソーセージ入りのサンドイッチなど塩味の効いたおつまみをトレイに載せてときどきお出しください。簡単なものでけっこうです。故人のことだけでもうかなり疲れているはずですから。

しかし格別の通夜で、お金がふんだんに使えるときには、熱くて濃いココアか、こつてりとした鶏肉のスープを真夜中に一杯欠かさずお出ししましょう。これに鱈のコロッケ、フライ、各種のコロッケ、さまざまなデザート、ドライ・フルーツがあれば申し分ありません。

飲み物は、裕福なご家庭のばあい、コーヒーのほかにビールやワインを一杯、鶏肉のスープとフライのおともになる分だけをお出しします。シャンペンはぜったいにいけません。品がないと思われるまいます。

豪華な通夜であろうと質素な通夜であろうと、良いラム酒カシヤニヤはぜひつねに置いておいてください。他になにがなくても、たとえコー

ヒーがなくても、カシャシーニヤだけは欠かせません。その慰めなくしてまともな通夜などありえませんが。カシャシーニヤのない通夜など、故人にたいする侮辱です。関心も愛情もないことを自ら明かすようなものです。

1

ドナ・フロールの最初の夫ヴァデーニヨが死んだのは、カーニバルの日曜の朝だった。バイーア女のいでたちで、いちばん元気なグループに入り混り、自宅からほど遠からぬ七月二日広場でサンバを踊っているときだった。ヴァデーニヨはそのグループの正式メンバーではなく、バイーア女の衣装を着たほかの四人の友人たちと一緒に飛び入りで踊り始めたところで、五人は、カカオの大農場主で裕福なうえに金ばなれの良いモイゼス・アウヴェスとかいう男のつけでしこたまウイスキーを飲ませてもらえるカベサのバーを後にして、そこへやってきていたのだった。

そのカーニバル・グループは、小さいけれども洗練されたギターとフルートの楽団と、四本弦のカヴァイキーニヨ奏者を伴奏に連れできていた。カヴァウキーニヨを弾くのはカルリーニヨス・マスカレーニヤス。娼館で有名なやせぎすの男で、その演奏たるや、ああ、なんたる神業。若い男たちはジブシーの仮装を、若い女たちはハンガリーやルーマニアの農婦の仮装をしていたが、実は、ハンガリー女やルーマニア女はおろか、ブルガリア女やスロヴァキア女でさえ、この若い女たちのように年齢と媚態の花を挿したり、腰を振って踊ったりなど決してしないものだ。

五人のなかでいちばん元気なヴァデーニヨは、そのグループが角を曲がって姿を見せ、骸骨さながらのマスカレーニヤスがカヴァウキーニヨをその卓越した腕前でつま弾く音を耳にしたとき、グループの先頭に駆けつけ、教会のように派手な色の巨大なルーマニ

ア女——金キラのスパンコールで覆われていたので、それはまるでサン・フランシスコ教会のようだった——の前に躍り出ると、こう告げた。

「さあ、おれがきたよ。トロロロ〔バイーアの貧しい地区のひとつ〕のロシア姉ちゃん」

これまた安物のガラスビーズで覆われ、耳に派手なイヤリングをぶらさげたジブシー男のマスカレーニヤスも、そのカヴァウキーニヨをいつそう掻き鳴らした。フルートとギターはむせぶように歌い、これは働くとき以外のヴァデーニヨの特徴だったが、人たるものかくあるべしというほどの模範的な熱意でサンバに没入した。グループのまんなかで旋回し、そのムラータ〔白人と黒人の混血女〕のままでタツプを踏むと、大げさな身振りで激しく腰を振りムラータににじり寄って行こうとした。ところが、とつぜん低く唸るような声を洩らすと、ふらふらよろめきざまに片側に傾いて地面に倒れこみ、口から黄色い粘液を吐き出したのである。ただ、死の渋面も、ヴァデーニヨがいつも浮かべている道化役者の満ち足りた微笑みをすっかりかき消すことはできなかった。

友人たちはこれがカシャサのせいと、大農場主のおごってくれたウイスキーのためなどではないとそのときはまだ考えていた。ヴァデーニヨくらいの大酒のみが、あんなウイスキーの四・五杯くらいでやられるわけがない。ところがカシャサの方は、ムニシパウ広場のボール・トリウンフォで自分たちが正式にカーニバルの幕開けを祝ってからずっと、つまり前夜からその日の正午まで飲み続けていた。それがせんぶ一気に頭に昇ってきて、ヴァデーニヨを襲い、眠らせたのだ、とそう考えていたのである。しかし巨大ムラータの方はそう、いつまでも勘違いしていなかった。プロの看護士で、死に馴染んでいて、病院で日常的に死と接していたからである。とはいえ、死とベリーダンスを踊ったり、ウイシクしたり、一緒にサンバを踊ったりするほど親しいというわけではない。ムラー

夕はヴァディーニヨの上に覆いかぶさると手を首に置いて脈を取り、身震いした。腹と背に冷たいものが走った。

「ああんてこと。死んでるわー!」

ほかの者たちもこの若者の骸むくろにふれて脈を取ると、金色の長髪乱れる頭を抱き起して、心臓の鼓動がどこかに感じられないか探しまわった。むだだった。どうしようもなかった。ヴァディーニヨはバ
イアのカーニバルと永遠に別れを告げたのである。

2

そのカーニバル・グループと通りは大騒ぎになった。騒ぎはさざ波のように周囲に伝わり、カーニバルの参加者からは「神よ、助けたまえ」の声が口々にささやかれた。感傷的なうえにヒステリックで、なにかと物議を醸すアネーテ先生が、ここぞとばかりにヒステリーの発作を引き起こし、小声で鋭い叫びをなんども上げると失神したふりをした。アネーテのこうした芝居はすべて、気取り屋カルリーニヨス・マスカレーニヨスのためだった。マスカレーニヨスがカヴァウキーニヨをつま弾くとき、なにかというとすぐに失神したがるこの神経繊細な女は、だつてあたし自身がすぐく感受性豊かな女だから、とひとりごちては猫が毛でも逆立てるように神経を逆立て、ため息をついていたのである。しかしアーティストの手は止まり、そのカヴァウキーニヨも今やすつかりだまりこんでいた。まるでヴァディーニヨが本人と一緒に最後の弦をあの世に持ち去ってしまったかのように。

あちこちから人が集まってきた。知らせはまもなく近所を駆け巡り、サン・ペドロやセーチ大通りやカンポ・グランジにまで届いて、物見高い連中を引き寄せた。遺骸のまわりにはちよつとした黒山の人だかりができ、ああでもないこうでもない小田原評定をささやき合っている。ソドレに住む医者に呼び出しがかかった。交通

整理の警官はホイッスルを引っ張り出すと、町じゅう、カーニバルじゅうにヴァディーニヨの死を知らせるかのように、ホイッスルを鳴らした。

〈なんでヴァディーニヨなんだ：かわいいそうに!〉ストッキングを被って仮装した男がすっかりしよげかえつてこうつぶやいた。だれもが故人を知っていた。ヴァディーニヨは顔の広い男だった。陽気で気さくな性格。短く刈り込んだ口髭。威風堂々たるやくざ者。とくに飲んだり、打ったり、ばか騒ぎをしたりする場所ではみんなから愛されていた。近所でヴァディーニヨを知らぬ者はいなかった。

袋地スツックの服を着て、熊の被り物をかぶった別の男が、密集した人だかりをかいくぐってきた。男は、仏さまの姿をどうにか拝むことができたが、被り物を脱ぎ捨てると、つらそうな表情でこう言った。

「おれの同胞はらから、ヴァディーニヨよ。いったいなんだってこんな姿に:」

〈いったいなんでこんなことに? なんだって死んじまったの?〉他の人たちからも口々にそんな声が漏れたが、これに答えを出そうとしてある人が言った。「カシャサのせいだな。こんなに突然死んだ理由としては、あまりに単純な説明である。こんどは猫背の老婆が立ち止ると、周囲を一瞥してこう言った。

「まだこんな若駒じやに。なんでこんな若うして死んじまったのかの?」

問いと答が入り乱れた。そのあいにも医者はヴァディーニヨの胸に耳を当てていたが、最後に反論を開陳した。言わずもがなの反論だった。

〈ヴァディーニヨはサンバを夢中で踊ってたんです。それで、だれもきつと気が付かなかつたんでしょう。あいつが、すっかり死に支配されたあちら側にすでに転がり落ちていたことに〉——こう説明したのは、カシャサの酔いからすっかり醒めた四人の友人のうち

のひとりだった。素面しらふに戻って動揺している。バイーア女の衣装を着て、頬を真っ赤に塗りたくったまま半ば呆然としていたが、その眼の下には、焦げたコルクのような黒々とした隈が浮いていた。

バイーア女の仮装をしていたからといって、この五人の若者がまっとうな男であることに疑いをさしはさんではいけない。五人がバイーア女の仮装をしていたのはただ、道化とおふさげでカーニバルを盛り上げようとしたからにすぎず、オカマだとか、異常な嗜好が疑われるとかいうわけではなかった。五人のなかにさいわいゲイはいなかった。ヴァデーニヨなど、糊付けしてアイロンをかけた白いペチコートの下にキャツサバの巨根さえぶら下げていて、一歩進むごとにスカートを持ち上げてその尋常ならざる大きさの猥褻な姿を覗かせるものだから、女たちは抜け目なく恥ずかしいフリをして顔を両手で覆い、けらけらと笑っていたくらいである。その巨根が今ではむき出しになった股からだらりとぶら下がっていたが、笑う者などひとりとしていなかった。友人のひとりが気づいてヴァデーニヨの腰から巨根を取り外した。だが、巨根を取り外したからといって仏さまの品が良くなったり、慎みが増したりしたわけではない。カーニバル中の仏さまだというのに、ぶざまな仮装を補ってあまりある鉄砲玉の痕も、胸を滴る血も、なにひとつとして飾られてなかったからである。

ドナ・フロールが現場に到着したのは警官とほぼ同時だった。ドナ・ノルマが先を行き、そこいってどいて、と道を空けさせたことは言うまでもない。ドナ・フロールが近所のおばさんたちに腕を支えられて広場の角に姿を見せたとき、ああこれでこの人もやもめだ、とだれもが思った。溜息をついたりうめいたりしながらやってきて、嗚咽を抑えることもままならず、おびただしい涙を流していたからである。しかも家事をするときに着る疲れた部屋着を羽織り、これまたくたびれたスリッパを履いて、髪は乱れたままだった。こんなさまでもドナ・フロールはなお美しく、目に心地よ

かった。小柄で丸々としているが、肥満体ではない。肌はカポベルデデ（黒人とインディオの混血）特有の青銅色ブロンズ。艶やかな髪は青みがかった見えるほどの漆黒。眼は色つぼく、真っ白な歯のうえには肉厚の唇が開いている。数多くはなかったかもしれないが、忘れたい愛の日々にヴァデーニヨ自身がきまつて使っていた表現を借りるなら、まさに「むしゃぶりつきたい女」である。妻が料理学校をやっていたせいかもしれないが、睦言のときになるとヴァデーニヨは「まだ青いトモロコシの粉でできたばかりのマヌエ（ブディングの一種）ちゃん」とか（香り豊かなほくのアカラジエ（インゲン豆をヤシ油で揚げたもの）ちゃん」とか（丸々肥えたほくの若鶏ちゃん」とか言っていたが、こうした譬えは、ドナ・フロールの物静かで従順な性格の下に隠された官能的で家庭的な魅力を見事に言い当てていた。

ヴァデーニヨは妻のひ弱さをよくわかっていて、それをあえて白日の下にさらけ出していたのである。おずおずと抑え込んだあの苦悶。いつもは慎み深くてもベッドのうえでは激しさを増し、抑えきれずに溢れ出すあの欲望を。本人がその気になりさえすれば、ヴァデーニヨの魅力は無敵で、どんな女も抵抗できなかつた。ドナ・フロールにしたところで、怒りや憎しみのほとぼりがまだ冷めないうちは、今度こそ屈するまいと心に固く誓いながら、夫の誘惑に抵抗できたためしなど一度としてなかつた。ヴァデーニヨを憎み、自分の運命がこの勝手気ままなボヘミアンの運命と結ばれた日を呪うことなど、しよつちゅうだったのに。

ところが、こうしてヴァデーニヨの突然死を目の前にすると心のなかはまだ苦しいばかりで、ふらふらと足を運びながらも頭の中では何も考えられず、何の思い出も蘇ってこなかつた。あの濃密な愛のひとつときさえも。ましてや、やりきれないほど苦しく孤独だったあの残酷な日々のことなど言うまでもない。息を引き取ったことで、まるで夫が欠点をすべて奪われてしまったように思えた。（この涙の谷間を越えるつかのまのとき）、そんな欠点などなにひとつ

持ち合わせていなかったかのように。

（その涙の谷間を越えるときはつかのままでした）。尊敬すべきエバミナンドス・ソウザ・ピント先生は、未亡人に挨拶しようとしてつい慌てて気取りが出たせいか、妻が夫の亡骸にたどり着く前にそんなお悔やみの言葉を述べてしまった。これまた先生で、これまたある程度まで尊敬すべきドナ・ジーザは、笑いをこらえる同時に、同僚の慌てぶりも抑え込んだ。ヴァデーニヨの人生がつかのまだったことに間違いはないとしても——三十一歳になったばかりだった——よく知るドナ・ジーザの見るどころ、男にとってこの世はいささかも涙の谷間などではなく、それどころか、道化と誘惑と嘘と罪の連続だったからである。借金の返済を迫られ、約束手形の割引を余儀なくされ、保証人を説得せねばならず、示談に応じざるを得ないばかりか、期限の延期をできないまま手形の支払拒絶に遭い、公証役場、銀行、高利貸しに行けば顔をしかめられ、友人たちには逃げられる。ヴァデーニヨの心臓が厄介な試練や苦悶や動揺にさらされたのは、おそらくはこうした苦しみと混乱が原因の一部だろう。ドナ・フロールが精神的・肉体的苦痛を受けていたことは言うまでもない。なぜなら——とドナ・ジーザはそのぎこちないポルトガル語で考えた。ドナ・ジーザのポルトガル語にはどことなく北米の癖が残っていた。ブラジルに帰化し、自らをブラジル人と感じてはいても、この悪魔の言語だけではどうにも操ることができなかったのである——なぜなら、ヴァデーニヨがその人生でつかのまのあいだ涙の谷間を越えたとすれば、それはドナ・フロールが流した涙の谷間で、その大量の涙はゆうに夫婦ふたりぶんあつたからである。

こんなに突然の死に直面して、ヴァデーニヨを想うドナ・ジーザの心には懐かしさだけがあふれていた。なにかに言っても、気持ちよく接してくれたし、優しく、魅力的なところを見せてくれたのだ。とはいえ、それだからといって、また、バイーア女の仮装をし

たまま亡骸となった本人がこうして七月二日大通りに横たわっているからといって、ヴァデーニヨを崇め、現実を捻じ曲げてまで別のヴァデーニヨを創作しようとは思わなかった。ご近所の親しい友人ドナ・ノルマにはそんな説明をしたのだが、相手からは期待したような同意が得られなかった。ドナ・ノルマはヴァデーニヨに歯に衣着せずついども直言し、異見を唱え、説教の山を築いてきた。あるときなど警察に訴えてやると言ったことさえある。だが、この苦しみに満ちた最後のときに、故人の目立って不愉快な面をあげつらう気にはなれず、生まれながらの優しさやいつでも他人の力になろうとするその姿勢、友人にたいする忠誠心や議論の余地なきその寛大さ（他人のお金にかんしてはとりわけその寛大さが発揮された）、物事にこだわらず生きる底抜けの陽気さといった良い面だけを褒めてやりたかった。しかも、つきつきりでドナ・フロールの面倒をみていたために、不愉快な真実を語るドナ・ジーザの話にゆっくり耳を傾ける余裕などなかった。いっぽうドナ・ジーザにとつては、なによりもまず真実が大事で、ときにはそれを荒々しく無情な姿に見せようとする姿勢からくるものだったのかもしれない。自分の善意を守ろうとする姿勢からくるものだったのかもしれない。というのも、ドナ・ジーザのお人よしぶりはいささか度を越して、だれの言うことでも信じていたからである。ドナ・ジーザはヴァデーニヨを批判したり断罪したりするためにこの男の悪事を思い出していたわけではない。ヴァデーニヨが好きで、ふたりはよく長々とおしゃべりに耽った。ヴァデーニヨが活躍する裏社会の心理を理解したが、ヴァデーニヨの方では、そばかすのあるたくましい胸の谷間をワンピースの襟ぐりから覗き込みながら、さまざまな事件について語って聞かせたものだった。おそらくドナ・ジーザはドナ・ノルマよりもこの男のことを理解していたにちがいない。だが、ドナ・ノルマとは反対にヴァデーニヨの欠点をひとつたりとも割り引こうとは考えなかった。本人が死んだとい

う理由だけで嘘をつくつもりはなかったからだ。ドナ・ジーザは自分自身にさえ嘘をついたことがなかった。どうしても必要なとき以外は。そして今回がその「どうしても必要なとき」でなかったことは言うまでもない。

肘鉄とその絶大な人気で人ごみをかき分けかき分け進むドナ・ノルマのあとを、ドナ・フロールはついていった。

「さあさ、みんなどいとくれ。このかわいいそうな奥さんを通してあげて：」

ヴァデーニヨはそこにいた。口元に笑みを湛えたまま舗石のうえに横たわっていた。全身白とブロンドに包まれ、安寧と無垢に満たされていく。ドナ・フロールは一瞬立ち止った。夫であることがすぐにわからなかったのだろうか。いやきっと、今や否定しようのない事実となった死をただちに受け入れられなかったのだろうか。

しかしそれもほんの一瞬のことだった。臓腑の底から叫び声を絞り出すと、ヴァデーニヨに身を投げ出し、動かぬ体をひしと抱きしめて、髪の毛といわず、赤く塗った顔といわず、開いた眼といわず、ふてぶてしい口髭といわず、ぽっかりあいた、もう永遠に生き返らない唇といわず、あらゆるところに接吻をした。

3

カーニバルの日曜だった。夜ともなればだれもが自動車パレードに参加する。徹夜のどんちゃん騒ぎを楽しみにする。ところが、予想に反してヴァデーニヨの通夜は大盛況だった。ドナ・ノルマが鼻高々と言い放った言葉を借りれば、〈嘘偽りのない大成功〉である。

遺体運搬業者は遺体をとりあえずベッドの上に置いた。ご近所さんたちが応接間に移したのはその後のことである。業者は急いでいた。カーニバルになると仕事が増えるのだ。他人が楽しんでいるあ

いだに、自分たちは、事故や喧嘩で犠牲になった死体を相手に孤軍奮闘しなければならぬ。遺体を包む汚れたシーツをひっぺがしたり、寡婦証明書を手渡したり。

ヴァデーニヨは夫婦が使っていたベッドに生まれたままの姿で横たわっていた。それは頭板と足板にあたる金属の鑄物に手の込んだ裝飾がなされたベッドで、結婚した六年前、競売で競り落とした中古品だった。ドナ・フロールは部屋でひとりになると封筒を開け、医師の所見を眺めて頭を振った。こんなこと、いったいだれが予想できただろうか？ 見たところあんなに頑健そうで、まだあんなに若かったのに！

ヴァデーニヨはいちども病気をしたことがないのが自慢だった。一週間、一睡もせずに飲んだり、博打を打ったり、女の子たちとばか騒ぎができることと豪語していた。そしてじっさい、まるまる一週間家に顔を見なかったことさえあった。いまにも気が変になりそうなのドナ・フロールをほったらかしにして。ところが、大学の病院の医師の所見には、ヴァデーニヨはいずれこうなることが避けられない状態にあったと書かれていた。肝臓はとくに役立たずになつており、腎臓は消耗し、心臓は疲れ切っていて、これではいつ死んでもおかしくない。それこそが突然死の原因だ、と。カシヤサ。連夜のカジノ。乱痴気騒ぎ。それに、遊ぶ金欲しさに、気でも狂ったように金策に駆け回っていた。これではあの頑健な体もだめになるだろう。ただ、見た目だけは健康そうだった。あの姿を見て、こんなに仮借のない断定を下せる人などいただろうか？

仏さまに服を着せるというデリケートな仕事に手を貸そうと手ぐすね引いて待っているご近所さんたちを呼び入れるまえに、ドナ・フロールは夫の亡骸をひとりじつくりと眺めた。ベッドの上でいつも喜んでそうしていたように、素っ裸で横たわっていた。金色の産毛が腕と胸を覆っている。左の肩にはナイフによる切り傷があった。なんて男らしくて、格好いいの！ 楽しみをうんと知ってる人

だったわ！ 若い未亡人の眼にはまた涙がこみ上げてきた。余計なことは思ひ出さないようにしよう、と思った。通夜の晩なんだから。

でも、こうして素っ裸でベッドに横たわっている姿を見ていると、どんなに邪念を追い払おうとしても、欲望を全開にしたときのヴァデーニヨが思い出されてしかたなかった。ヴァデーニヨはどんなものであれ一切身に纏うのが嫌いで、恥ずかしいからとシートで体を隠すことさえなかった。羞恥心が苦手だったのだ。ドナ・フロールをベッドに呼ぶときには「さ、愛し合おうよ、ねんねちゃん」と言う。ヴァデーニヨにとつて愛はどこまでも陽気で自由なお祭りで、自他ともに認める例の情熱で愛の行為にのめり込んだ。身分も階級も違う数多くの女性が、口をそろえてその能力の高さを認めている。結婚したところ、ドナ・フロールは羞恥心の塊で、まごついてばかりいた。夫が素っ裸になるよう要求していたからである。

「ネグリジェ着たままで愛する女なんか見たことあるかい？ なんだってそう隠そうとするんだい？ 愛つていうのは神聖な行為だよ。なにしろ神さまが天国でつくったんだから。知らなかったのかい？」

服を脱がすだけでは物足りず、光と影が神秘的に交錯する妻の身体の豊かな曲線や深く落ちくぼんだ細部にふれ、それと戯れるのだった。ドナ・フロールが体を隠そうとしても、ヴァデーニヨは笑いながらシートを引きはがし、しっかりとした乳房、並外れた尻、ほとんど体毛のない下腹部をむき出しにする。ヴァデーニヨはおもちゃで遊ぶように妻の身体と戯れた。あるいは薔薇の蕾にふれるように。薔は夜毎の喜びのなかで次第に花開いていった。

ドナ・フロールは臆病さを徐々に脱し、その淫奔なお祭りに身を委ねるようになる。次第に烈しさを増し、大胆で活発な愛人へと変わっていったのである。とはいえ、けつして羞恥心と気おくれ

をすっかり失ってしまったわけではなく、その度ごとにこれを克服しなければならなかった。というのも、狂ったような大胆さから覚め、気の遠くなるような恍惚の叫びを発し終わるとすぐにまた、おずおずとした恥ずかしがり屋の妻に戻るからだだった。

ヴァデーニヨの遺体とこうして二人だけで向き合ってみて、ドナ・フロールは自分が夫を失ったことに初めて気づいた。もうこの人の腕の中で恍惚感を味わうことはないのだ。このことにそれまで気づかなかつたのは、その日の午後、悲劇の噂が口伝えにささやかれてから遺体運搬車がやってくるまでのあいだ、まるで悪夢のなかにいるようで、一種の興奮状態にあったからである。知らせに衝撃を受け、泣きながら七月二日広場まで行き遺体と対面すると、大勢の人たちが取り巻いて、何くれとなく世話を焼いたり、勇気づけたり、慰めたりしてくれた。帰りはドナ・ノルマとドナ・ジーザ、エパミノンダス先生、居酒屋店主のスペイン人メンデスに半ば担がれるようにして家までたどり着いた。なにもかもあまりに慌ただしく、ヴァデーニヨの死に思いを馳せたり、それを身に染みて感じたりする暇などなかった。

遺体は遺体運搬車によって広場から運び出されたが、それでもドナ・フロールの気持ちはひとときも休まらなかった。突然、ご近所ばかりか近隣地区全体の好奇の的になってしまったのだ。しかもカーニバルの日曜日に。今や派手な色の風呂敷包にすぎなくなってしまったバイーア女姿の夫がシートに包まれて家に戻るまで、ご近所や知人や友人が入れ替わり立ち替わりやってくるので、ドナ・フロールは、お悔やみや友情の証や優しい言葉を次から次へと受けなければならなかった。カーニバルともなればそれだけで家事はいいかげんになるものだが、ドナ・ノルマとドナ・ジーザはそのいいかげんな家事さえ今やすっかり放り出し、食事の采配は、忙しく立ち働くお手伝いさん任せにしていた。いずれ劣らず献身的で優しいふたりは、ドナ・フロールのそばから片時も離れることなどできなかつ

たのである。

外はカーニバルが真つ盛りだった。仮面を被った人たち、カーニバルのチーム、団体。趣向を凝らした仮装や愉快な仮装が見える。大人数の楽団が奏でる音楽。カーニバルを刻むリズム。大太鼓の音。さまざまなチームや団体の出す音。アフォシエ（バイアのカーニバルで演奏と舞踏を路上で繰り広げる宗教色を帯びた集団）の打ち鳴らす小太鼓とアタバケ（アフリカ起源の踊りで使われる太鼓）の音が聞こえる。ドナ・ノルマはときどき我慢がでなくなつて窓に駆け寄ると、窓から身を乗り出して視線を大胆に泳がせ、見知った仮面の人を見つけるとヴァアディーニョが亡くなったことを伝え、独創的な仮装や素敵なチームが見えれば拍手を送った。とりわけ生き生きとした一団が曲がり角から姿を現すと、ドナ・ジーザを呼び寄せる。そして午後もだいぶ深まって、「海の息子たち」というアフォシエが大人数のサンバダンサーを率いてその忘れがたい姿を通りに見せたときには、ドナ・フロールまでもが涙を抑えきれないまま窓に近寄つて、新聞でなんども告知されていたバイアーカーニバルで最も美しい花形アフォシエを覗き見た。窓から姿を見せないように、ドナ・ジーザの大きな背中中に隠れてこっそりと。ドナ・ノルマは仏さまのことも礼儀のことも忘れて、熱烈な拍手を送っていた。

ヴァアディーニョ逝去の知らせが伝わってからの一日はざつとこんな様子だった。ベルナボートとかいう気難しい陶器工場のオーナーの妻で、最近通りに移り住んだ控えめで高慢ききなアルゼンチン女性ドナ・ナンシーまでもが、その豪邸の二階からわざわざ降りてきて、ドナ・フロールにお悔やみの言葉を述べ、なにかお手伝いできないかと申し出て、感じの良い礼儀正しい人であるという印象を与えた。そしてドナ・ジーザと、人生の短さ、はかなさについて哲学的な言葉を交わしたのであった。

以上のことからおわかりのとおり、ドナ・フロールには、自らの新しい境遇や人生が変わってしまったことにたいして、ゆっくり思

いを馳せる時間などなかった。ヴァアディーニョを死体保管所から引き取り、いくどもいくども愛を交わしたダブルベッドに裸のまま安置したそのときになって初めて、夫の死によつて取り残されたわが身の孤独に気づき、寡婦になったことを痛感した。もう二度とふたたびこの鉄製のベッドに横たえられることも、服とスリッパといちばん内密な下着をはぎ取られることも、シートと一緒にそれらを鏡台に放り出されることも、身体のすみずみまで触れられ、興奮させられることもないのだ。

ああ、もう二度とふたたびないんだわ。ドナ・フロールはそう思った。なにか喉にひっかかるものを感じ、足が震えた。そして、すべてが終わったことを理解した。もはや言葉も涙もなく、いかなる興奮もない。死にまつわるどんなイメーজからも遠く離れて、ただそこでじつとしていた。素っ裸の夫と自分だけ。ヴァアディーニョの抜け殻と自分だけだった。もう二度と夜が明けるまでヴァアディーニョを外で待ったり、生徒から預かったお金を隠したり、町の美女たちとの関係を見張ったりする必要もないのだ。カシヤサを飲んだり機嫌が悪かったりした日に殴られる心配もない。もう二度とご近所の噂話や悪口を耳にしなくていい。愛のお祭りのために、忘れられないあの愛のお祭りのために、一緒にベッドの上に転がって、ヴァアディーニョの欲望に身体をすつかり開いて、服もシートも恥じらいも脱ぎ捨ててゆくことも、もうないのだ。なにかがひっかかって喉を締め付けているようだった。匕首のように鋭い痛みが胸を刺していた。

「フロール、そろそろ服を着せてあげたら？」ドナ・ノルマの緊張した声が隣室の今から響いてきた。「弔問の方々がお見えになるわよ……」

寡婦はドアを開けた。落ち着いた厳粛な気持ちだった。嗚咽もうめき声ももう出ない。心は冷えて固くなつていた。孤独だった。ご近所の方々が手伝いに入ってきた。棺桶を引き渡すために葬儀社

「花の天国」のヴィヴァルドさんが自らやってきて手を貸し、手際よく、一介の風来坊を見栄えのする死者に仕立ててくれた——棺桶はかなり安くしてくれたが、それは棺桶と墓石を賭けたルーレットとバカラ賭博でヴィヴァルドさんがヴァディーニョの博打仲間だったからである。ドナ・フロールは一言も口にせず、一筋の涙も見せず、すべてに立ち会った。孤独だった。

〈第1部第4章に続く〉